

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 24 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381031

研究課題名(和文)地域の教育・文化拠点としての近世寺院：宗教施設をめぐる人間形成文化史研究の試み

研究課題名(英文) Characteristics of a temple as an educational and cultural centre in a community in the early modern period in Japan: from a viewpoint of combining Buddhist history and educational history

研究代表者

梶井 一暁 (Kajii, Kazuaki)

岡山大学・教育学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：60342094

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：寺院は第一に宗教施設であり、信仰と祈念の場である。同時に仏書や漢籍を討究する学問寺であり、庶民に手習指南や読書指導を行ったり、蔵書を形成して書籍を貸し出したりする場でもあった。近代学校教育制度が現出する以前、近世社会において寺院は学問所であり、学校であり、図書館であった。いわば地域学習センター的役割を担っていた。近世社会に形成される知的環境の実態と特質を解明するため、地域の教育・文化拠点としての寺院への視角は欠かせない。

本研究を教育史と仏教史を結ぶ位置に据え、とくに近世寺院による庶民の文字学習への関与、私塾の学習ネットワークのなかの僧侶という側面を考察した。

研究成果の概要(英文)： Basically a temple is a religious facility in faith and prayer. And also from a historical viewpoint, each that was a place for being studied Buddhist scriptures or Chinese classics by scholar priests, for being given lessons in writing and reading to common folks and for being forming a collection of books. Until the system of the modern school education had developed in Japan, that is to say, in the early modern society, each temple served a function of academic learning centre, school and library. A historical research in a temple as an educational and cultural centre in a community can be studied to explore a diverse situations and opportunities of learning in that society

This study is to be aimed at combining Buddhist history and educational history and particularly the present writer considers significances of a role of a priest as a writing-master in a community and characteristics of activities of one as a learner at private academies (Shijuku).

研究分野：教育学(教育史)

キーワード：教育史 仏教史 近世 寺子屋(手習塾) 私塾 寺院 僧侶

1. 研究開始当初の背景

教育史研究を基盤としつつ、教育史と仏教史を架橋する人間形成文化史の領域の開拓を試みる観点から、本研究を設計するものである。

教育に関する営みは、単に教育のそれとして成立しているのではない。政治、経済、文化、宗教などの要素が関連しあって生成している。とりわけ近代学校教育制度現出前の近世社会にそれは顕著であった。地域の教育拠点としての近世寺院に着目し、その考察を申請者は、仏教史研究の成果を摂取しつつ、教育史研究の一主題として積極的に位置づけて行うことを企図した。

従来、教育史研究において寺院に関する考察は、あまり進捗をみない領域であった。研究史が示すのは、藩校、私塾、手習塾（寺子屋）などの学校的機関の研究蓄積に比し、寺院の教育史的意義を問う作業の手薄さである。しかし、近世社会における寺院の教育史的意義を探究することは、学校的機関に限らない、歴史のなかに生成する教育的営みの多様な様態に光を当てる積極的作業となると考える。

申請者は、本研究を教育史と仏教史を結び位置に据え、地域の教育・文化的拠点として近世寺院が果たす役割と特質を明らかにすることをめざした。

2. 研究の目的

近世寺院は第一に宗教施設であり、信仰と祈念の場である。同時に仏書や漢籍を討究する学問寺であり、庶民に手習指南や読書指導を行ったり、蔵書を形成して書籍を貸し出したりする場でもあった。近代学校教育制度が伸張する以前、近世社会において寺院は学問所であり、学校であり、図書館であった。いわば地域学習センター的役割を担っていた。

近世社会に形成される知的環境の実態と特質を解明するため、地域の教育拠点としての寺院への視角は欠かせない。本研究では、とくに(1)近世社会における庶民教育の担い手としての寺院の意義、(2)私塾の学習ネットワークのなかの僧侶の特色、(3)近世・近代移行期における宗教と教育の関係の変化などの側面を浮きあがらせることに努めた。

3. 研究の方法

従来、近世寺院、とりわけ農村に所在した一般寺院の教育史的意義を明らかにする問題関心から、史料の収集・調査はほとんど進められておらず、まとまった刊行史料も例をみない。

この状況をふまえ、本研究では、第一に、新たな一次史料の発掘・分析に力を入れた。都市や町に所在した有名寺院の史料は、報告

の蓄積が一定程度あるが、農村の一般末寺の史料は、あまり報告の例がない。しかし、地域において果たした寺院の教育的・文化的意義を問う場合、幕藩体制の確立下、本末制と寺請制にもとづいて農村個々に定着していた一般末寺の役割をとらえることが欠かせない。その事例として飛騨国や美濃国の農村寺院を調査し、伝存する寺記、日記、手習入門帳、蔵書録などの史料を収集した。

第二に、地域の末寺に住し、人びとと接する僧侶が、かつて若いころに、仏教学や関連学問を専門的に学ぶため、京都や江戸の本山などに附設する学林、学寮、檀林などと称される諸教団の中央的教育研究機関に在籍し、都市の文化的環境に接続する存在であったことに着目し、学林などの史料を調査した。第一の末寺側の地方史料と、この本山機関側の中央史料の突き合わせの有効を意図した。

第三に、近世教育史研究で進展している領域のひとつである私塾について、仏教史の観点を交えて考察を進めた。私塾に入門する僧侶について、諸入門簿からこれを把握し、漢学・漢詩学習者としての彼らの活動と、私塾学習者のなかで彼らが形成するネットワークの一端を把握することに努めた。

4. 研究成果

(1) 庶民の文字学習を支えた寺院

手習塾（寺子屋）は近世社会に広く普及した文字学習の場であった。手習塾の師匠（教師）としての僧侶の意義を再評価することをねらいとして、飛騨国農村部において僧侶が寺坊で開いた手習塾の事例を検討した。寺院は浄覚寺という真宗寺院（東本願寺派）であり、13世智成と14世龍溪は寺子10-20人ほどの小規模の手習塾ながら、代を継続してこれを経営していた。

同寺の古蔵を開けてもらい、伝存する記録、日誌、往来物（手習教科書）などの史料を調査した。収集・撮影した史料のほとんどは近世期の同寺歴代住職による手稿であり、内容の判読を行った。年次不明の史料も含むが、文化・文政期以降のものが主である。

「寺子屋」は近年、学術著作などでは「手習塾」と記述されることが多くなってきているが、そもそも「寺」子屋と呼称されながら、案外、寺院経営のその研究はあまり進展していない、という研究史上の課題がある。従来、近世における手習塾の発達は、中世的伝統に根づく寺院によるその経営を離れた、庶民によるその経営の拡大にこそ、近世的特色があると積極理解されてきた背景があるためである。よって、かえって寺院経営の手習塾の実態が不明であるという状況があった。

本研究は、手習塾研究におけるこの空白を埋める意義を第一に有するとともに、くわえて、つぎの成果ももつものである。すなわち、近世社会に発達した庶民の文字学習の場として強調される手習塾について、寺院が中世

社会から引き続き果たすその役割を再考する視角を差し込むことにより、それが中世的な教育伝統や文化環境とも接続しつつ、総体として促進されるものであったことを考察する論点を提示するにいたった。

もう少し述べれば、浄覚寺を智成から継承した龍溪は、近世末を経て近代の社会も生きたひとりであった。彼はその新しい社会において、初期近代学校で初等教師をつとめた。龍溪は近世・近代移行期に教師として、「寺子屋教育」から「国民教育」へと、その従事すべき位置を微妙に移していく。僧侶の教師性を歴史的に考察する視点は、教育と教師をめぐる中世・近世・近代の大局を観察する作業に活きると考えている。

なお、浄覚寺に保管される主要な史料はほぼ撮影し、その写真画像は保存している。しかし、実地調査の際、住職や地元郷土史家への聞き取りで判明したところであるが、同寺に伝存すべき史料の一部が、現在、外部に提供されたまま、まだ返却されないようである。史料が外部に持ち出されたのは、昭和末年から平成初年頃のものであり、故人になられた当該者もいる模様である。持ち出された史料の現況は把握しきれていないが、この未返却分のなかに、天保期を中心とする日記など、研究上重要であると考えられる史料がある。農村の困窮期に寺院がどのように村民と交流し、またその交流のなかで手習塾経営がどのような意味をもったか、などを考察しようと期待される。そのため、寺院や当時の状況を知る郷土史家との連絡を維持し、科研費助成期間後も調査を継続したいと思っている。

(2) 僧侶教育と都市

地域の末寺僧侶が仏教学などを専門的に学ぶ宗門の中央的教育研究機関としての京都の学林や学寮に着目し、その学籍簿を調査した。学林は西本願寺、学寮は東本願寺の本山学校的な中央機関であり、全国から末寺僧侶が参集した。それぞれの機関には、およそ1000-2000人が参集したと把握される。

宗門による異同はあるが、基本的に末寺僧侶の多くは、たとえば、西本願寺末や東本願寺末の真宗僧侶の場合、寺院に住持する以前にそれぞれ学林や学寮で3年から十数年にわたり、仏教学や関連学問の研究を行った者であり、あるいは住職後も定期的に学林や学寮に再教育の機会として継続入学する者であった。この点で、僧侶は村落にあって、京都・本山と結ばれる学問的つながりを契機として、数少ない都市文化媒介者としての性格を具備する存在であったといえる。

まず、西本願寺学林の学籍簿である『大衆階次』(龍谷大学所蔵)を調査し、個別寺院の調査を進めている飛騨国出身者を中心に在籍者を把握した。その作業により、飛騨の寺院から京都の学林に学ぶ僧侶について、都合72人を確認することができた。今後の研究展開も見据え、美濃国と三河国の出身の学

林入学者の把握にも努め、それぞれ310人、74人を確認できた。

如上の学林の『大衆階次』に関する調査内容については、飛騨地域の郷土史雑誌である『斐太記』に論文を投稿する予定である。

また、東本願寺学寮の学籍簿『入寮着帳証印』(大谷大学所蔵)についても、入学者数の確定にはまだいたっていないが、分析を進めている。

以上のような『大衆階次』や『入寮着帳証印』の調査をふまえ、京都の学林や学寮に学び、のちに寺坊に帰って手習塾を開設したり、地元の文人と詩歌の交流を進めたり、いわば都市文化の村落への持ち帰りを行う僧侶について、個別事例の検討に着手した。

前述の飛騨国の智成や龍溪はそのような僧侶である。彼らは寺坊で小規模ながら手習塾を開き、村落の子弟に手習指導を行いつつ、かつ本居宣長・大平と師友の関係を有した飛騨国の代表的な国学者である田中大秀らとも交わった。寺坊の浄覚寺が大秀らや他の僧侶も迎えて催される詩歌会の会場となることもあり、まさに寺院は教育と文化の実践地であり、僧侶は地域の教師であり、文化人であった側面が、智成らの活動にあらわれているといえる。

智成らが果たす地域の教育・文化的環境の形成に対する役割と意義についても、調査内容をまとめ、はやいうちに『斐太記』などに発表したいと思っている。在地の郷土史雑誌に成果を発表することは、科研で得られた成果をより直接的に地域に還元できる機会となると積極的に考えている。

(3) 私塾学習ネットワークのなかの僧侶

近世の民間社会に発達した学問の専門塾である私塾は、private academyとして海外の研究者も着目する教育機関である。僧侶はこの私塾の門をたたく学習者でもあり、彼らの学習の経過や人的関係の形成について、そのあり方を追った。科研費助成期間後も調査を継続する計画であるが、現在までつぎのような寺院や僧侶に着目して考察を進めた。

第一に、光慶寺は美濃国の真宗寺院(東本願寺派)である。同寺から京都の学寮に学び、また近世最大の漢学塾として知られる豊後国の咸宜園にも入門する僧侶が出ており、着目した。

僧侶は前述のように、本山の仏教教育研究機関である学寮や学林で仏教学を研鑽するだけでなく、漢学・漢詩に通じる彼らは私塾に学ぶことも多かった。私塾の入門簿をみると、僧侶の名前がしばしば確認される。広瀬淡窓・旭荘が主催する咸宜園について、その入門簿からやはり僧侶の入門が確認されることは、従来から指摘されている。しかし、その具体的な修学活動はこれまでほとんど明らかでない。咸宜園の入門僧侶の多くは真宗僧侶と思われ、光慶寺の包含と得一は咸宜園に学んだ真宗僧侶の例である。包含がさき

に入門し、得一はこれにつづいている。

とくに留意されるのは、得一は京都の学寮と日田の咸宜園に学び、美濃に帰郷したのち、寺坊に仏教学と漢学を教える私塾を開いてもいることである。僧侶が仏教学の私塾たる学寮を含む近世私塾の学習ネットワークのなかに位置していることがわかるであろう。

第二に、法蓮坊（豊前国）と広円寺（豊後国）の周海も、私塾に学ぶ僧侶であった。従来、ほとんど論及されてきていないが、伊藤仁斎の古義堂の門人にも僧侶がおり、法蓮坊と周海はその例である。法蓮坊がさきに入門し、周海は法蓮坊の紹介で入門している。紹介による門戸の開かれ方は、咸宜園に入門した包含と得一の場合と似ている。人と人をつなぐ紹介という人的関係が、私塾の質量の両面での発達を支えている背景が推察される。

法蓮坊らの例で興味深いのは、法蓮坊は僧侶の周海だけでなく、筑前国の神職である吉田靱負が入門する際にも紹介役を担っていることである。神職に関する教育史研究は近年成果が提出されており、これをふまえつつ、本研究では、神職を含む宗教者の修学過程について、僧侶を媒介とした京都と地方（九州）を結ぶ学習ネットワークの形成と私塾の発達の見点から、考察を進めた。

近世僧侶の修学過程の分析は、個別教団の僧侶養成史をこえ、一般教育史として私塾研究の進展に資する作業となると考えている。京都の学寮や学林を、仏教教育・研究を専門とする「私塾」の一形態としてとらえ、教育史研究で進展する私塾研究のなかに、学寮や学林を系譜づける視角を提出し、実証研究を進めるため、今後も調査を継続したいと考えている。仏教史と教育史を架橋する作業の端緒となるように努めたい。

（4）仏教の文化や伝統を活かした実践研究

本研究の一環として、仏教の歴史や伝統の現代的意味を問う観点から、四国遍路に関する実践研究を試みた。四国は前任校時代からしばしば調査に入ってきた地域である。

四国遍路という、今にも生きる文化遺産に着目し、実際に阿波国の遍路道を歩き、寺院を訪ね、地域に伝わる仏教文化を体験的・実践的に考究した。

歴史研究として史料の分析や文献の検討を行うことにくわえ、歴史と現在をつなぐ実践研究を発展的に実施しえたことは、人間形成文化史研究を志向する本研究における特色的な成果であると考えている。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

KAJII, Kazuaki, 'The Development of the National Education System and the Change of Educational Outlook at the Turn of the 19-20th Centuries of Japan: the Formation

of Human Capital Through School Education', The Proceedings of the Sixth Japan-China Teacher Education Conference 2015, 査読無, Vol.6, 2016, pp.143-152 (原文中国語)。

梶井一暎、生存の学としての教育学の可能性、日中教師教育学術研究集会論文集、Vol.5、2015、pp.207-216。

梶井一暎、子ども四国遍路歩きの教育的意味、日本仏教教育学研究、査読有、Vol.22、2014、pp.143-163。

〔学会発表〕(計2件)

梶井一暎、近世・近代移行期における公教育の確立と教育・技能観の変化、日中教師教育学術研究集会、2015.11.8.、鳴門教育大学（徳島県鳴門市）。

梶井一暎、生存の学としての教育学の可能性、日中教師教育学術研究集会、2013.9.16.、北京（中国）。

〔図書〕(計2件)

梶井一暎 他、国書刊行会、日本仏教教育学会記念論文集、2016（予定）、共著（「近代教育者の仏教観と教育実践：第六高等学校の池山栄吉の場合」執筆）。

梶井一暎 他、福村出版、新初等教育原理、2014、pp.52-70。

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

とくになし。

6．研究組織

(1)研究代表者

梶井 一暎 (KAJII, Kazuaki)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60342094

(2)研究分担者

なし。

(3)連携研究者

なし。